

高橋克彦
takahashi katsuhiko

火

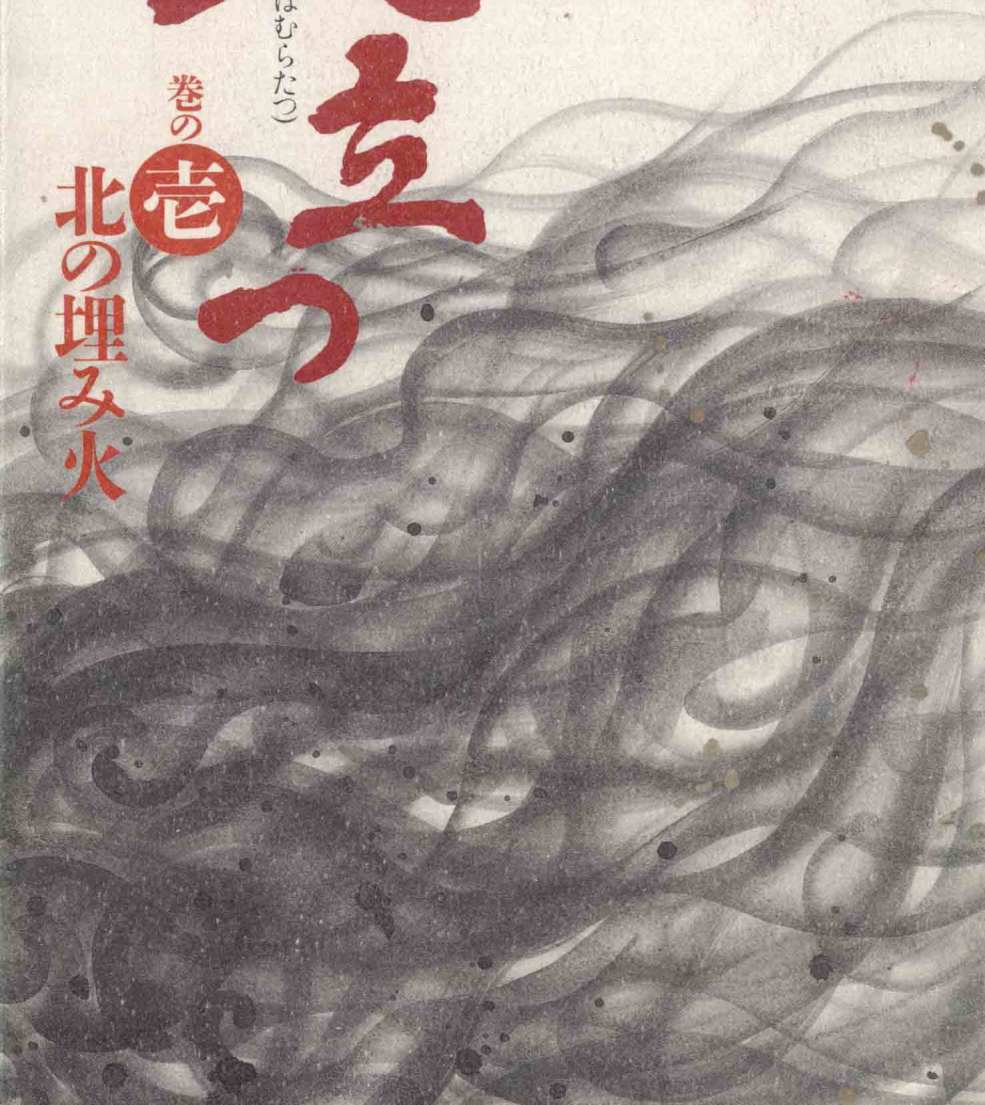
(はむらたつ)

巻の

壱

を

北の埋み火



炎立つ

(はむらたつ)

高橋克彦

takahashi katsuhiko

巻の

壱

北の埋み火

炎立つ 巻の壱 北の埋み火

1992年12月10日 第1刷発行

1992年12月15日 第2刷発行

[検印廃止]

著者 高橋克彦

発行 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町41—1 郵便番号150

電話番号03—3464—7311

振替 東京1—49701

印刷 大日本印刷株式会社 製本 株式会社石津製本所

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©1992 Katsuhiko Takahashi

Printed in Japan

ISBN4-14-005174-4 C0093

炎立つ

巻の壱

北の埋み火

装画 中島千波

題字 山田恵諦

装幀 蟹江征治

協力 NHKエンタープライズ

目次

プロローグ

5

北の埋み火

7

宿命

103

決壊

197

怒濤

285

プロローグ

思えば永承四（一〇四九）年の冬に、すべてのことがはじまった。平将門たいらのまさかどの乱が平定されて、およそ百十年。ここ陸奥みちのくに穏やかな月日が流れたというわけでもない。小規模な蝦夷えみしの反乱は、あたかも埋み火うづがくすぶるごとく出羽でわや奥六郡おくろくぐんに勃発した。それでも、それらの戦さはいずれも数カ月を待たずに鎮められてきた。蝦夷には蝦夷をもつて当たらせるといふ朝廷の政策が一応は効を奏していたのである。古くは坂上田村麻呂さかのうえのむらまろが滅ぼし、平将門すら抑えた朝廷にとって、もはや陸奥の脅威は有り得なかった。むしろ朝廷が警戒していたのは、平将門の乱以来、急速に力を蓄えはじめた平氏や源氏を筆頭とする武士団に対してであった。つい二十年前にも坂東で平忠常たいらのただねが叛旗はんきを翻しひるがえ、数年にも及ぶ永い戦さを繰り広げたばかりだった。だが武士たちはその戦さを通じてさらに力を強めた。いかに武士たちを操るかが政治の課題となりつつあった。陸奥はしばし忘れ去られていた。

その間隙かんげきを縫うように、陸奥には新たな鼓動がはじまった。

百年の間くすぶり続けていた灰の中に、巨大な火種が成長していたのである。不幸は、その火種自身が、自らの発する炎の激しさに気付かぬことにあった。

灰から頭を擡げた火種は陸奥の風に煽られて大きな炎を天に嘖き上げた。まだその炎は遠い朝廷にまで届かない。炎はますます勢いを増した。陸奥はその輝きに照らされた。

安倍頼良。

それが炎の中心に立つ男の名である。

この男が燃やした炎は、これから先、百三十年の永きにわたって陸奥を光の国とした。

北の埋み火

1

暗い川面に牡丹雪が吸われて行く。夕刻から降りはじめた雪は物見の男たちの視野を妨げている。日高見川（現在の北上川）の川幅は広い。中央さえ外れなければ安心とは言うものの、この時期、衣川の柵の近くまで船を運んだ経験を持つ水夫など一人としていなかった。頼みの綱は舵を取る腕よりも百二十人を乗せる軍船の強固さだった。たとえ船底を浅瀬に乗り上げたとしても、滅多なことでは沈まないはずである。それでも物見の男たちには緊張が続いていた。登米の補給地を過ぎれば衣川の柵まで停泊する場所がない。何刻かかろうと前進するしかないのだ。

肌を刺す寒さと、あるいは今夜中に到着できぬかも知れぬという焦りが緊張をより強めた。船足は苛立つほどに遅かった。

物見の背後に、船倉の扉を開けて近付いてくる幾人かの気配が感じられた。

「これは……ひどい降りじゃ」

船倉の屋根高くに掲げられている松明の灯が声の主を照らしていた。

陸奥守藤原登任であつた。この年六十一歳。高齢は白髪ばかりでなく足腰の衰えにもはつきりと表われていた。隣りの若者の肩にすがりつくようにして並んでいる。

「船を停め、朝を待つのが良策であろう」

不安定な甲板に必死で立ちながら登任は怯えた目を川面に注いだ。

物見の男たちは平伏していた。

「間に合わねばそれまで。いや、この儂が行かぬ限り婚礼を進めぬ。かような難儀をしてまで急ぐことではない。櫓を上げよ」

「お言葉にござりますが」

髪のを払いもせず物見の長が言った。

「停めたとして両岸は浅瀬ゆえ着けられませぬ」

「では戻れ」

「いずこにでござります？」

「桃生の城の近くにじゃ。俘囚の婚礼になど出る必要はない。雪に阻まれて諦めたと伝えればよからう。永衡が儂の名代を務めよう」

「これしきの雪で引き返したとあれば陸奥守さまの名折れとなりましょう」

登任に肩を貸していた若者が苦笑した。

「俘囚ごときの願いのために命を懸けてはおられぬ。儂は陸奥を預かる身ぞ」

「松明を屋根から下げよ。空を照らすより、竿に結んで川面に近付けろがよい」

若者は登任を無視して命じた。

「それで川筋がはつきりと見えるはずだ。商人どもはそうして冬の夜の川を渡る。冬戦さがないゆえにこの始末だ。心得ておけ」

物見の長は慌てて立ち上がった。水夫たちに指示をする。直ぐに屋根の松明が下げられた。長い竿に結ばれた松明が川面に伸ばされると視野が何倍にも広がった。物見の男たちから歓声が上がった。

「これで戻らずとも済みましょう」

若者は笑顔を見せて登任に向かった。

「いかにも……この地に慣れ親しんだそなたなればこそその知恵じやの。礼を言う」

「奥六郡に較べれば亘理はまだ穏やかな地にござります。みどもにとりましても衣川より先は見知らぬ国土。胆沢の城にさえ行ったことがござりませぬ」

「儂も似たようなものじゃ。多賀城に参って直ぐに胆沢城の検分をしたきりでな。どうも安倍頼良という男、性に合わぬ。胆沢城については永衡に任せておる」

登任はぶるつと体を震わせると若者を船倉に促した。船足は倍に早まっていた。

「これなれば二刻もせぬうちに衣川の柵まで行き着けましょう」

若者は肩の雪を払って言った。鋭い目をした若者であった。名を藤原経清ふじわらのつねきよと言う。平将門を討

ち取った藤原秀郷ひでさとを祖先に持ち、摂関藤原氏にも繋がる坂東では名の知られた武門の出自だ。もともとは下総しもうさを本拠としていたのだが、平忠常の乱に一族が荷担し、その責を受けて父の代より奥六郡にほど近い亘理に退けられたのである。内裏での官職こそないが、陸奥守を務めた祖父の功績を引き継ぎ、当主は代々従五位の高い位階を授かっている歴とした貴族でもあった。だからこそ陸奥守藤原登任とこうして同席ができる。

「大夫たいふどのの病いはいかがじゃ？」

早速に手炙てあぶりを引き寄せて暖を取りながら登任は脇の席に経清を招いた。席には最前からの酒と肴さかながそのままになっている。郎党が濡れたかわらけに酒を注いだ。寒さのせいか酔いがまわらない。

「めっきり弱りました。今年こそ桜を見れぬのではないかと案じております」

「儂の任期もあと二年。都に戻りしかば大夫どのの働きを言上し、ふたたび下総にと思つていたが……亘理で果てるなど、さぞかし大夫どのも無念であろう。心丈夫に待てとお伝えするがよい」「父もみどもも亘理が気に入っております」

「儂の前で瘦せ我慢は無用ぞ」

「二十年を過ごせばいずこも郷土にて」

「そなたは都の賑にぎわいを知るまいが、大夫どののはかつて内裏に参内したこともある身。哀れじゃ」反論しかけて経清は止めた。都育ちの者にどんな説明も通じない。都を一步でも離れれば都が

恋しいと嘆く者たちである。都以外の土地を愛する者などいないと決め付けている。任期を無事に勤め上げて都に戻るからこそが彼らのただ一つの願いなのだ。

〈それが今の事態を招いている〉

登任がいみじくも口にしたごとく、陸奥守を俘囚が婚礼に招くなど、奢り以外のなにものでもなかった。本来ならば陸奥守の居住する国府多賀城に安倍頼良が息子とその嫁ともども出向かねばならぬのが筋であろう。形だけの陸奥守が何代か続き、それが俘囚たちの軽視に繋がっている。陸奥守もまた安倍頼良からの貢ぎ物の多さに目をくらまされている。

へと言つて……このじじいではな

登任に陸奥守の気概を保つと進言したところで無意味に思えた。これも内裏が陸奥を侮つてゐる証拠であつた。ここ何十年か陸奥守には登任と同様に名ばかりの老齡貴族が任命されてきたのだ。彼らは奥六郡の中心にある胆沢城を厭い、多賀城に安穩とした日々を送つた。わざと俘囚たちとの諍いを避けて過ごしたのである。五年の任期が終われば栄達が待つてゐる。自身では賢く懷柔策を選んでゐるつもりなのかも知れないが、現実放任に近い。安倍頼良の権力が強まったのも不思議ではない。衣川の関を越えて陸奥国府が直接統治する磐井郡以南に侵出してきてはならないという定めは一応守られている。が、それも時間の問題と経清は見ていた。数年前に安倍頼良が本拠を奥六郡の中心から磐井郡との境界線に位置する衣川の柵に移したことでも明らかであつた。いや、磐井郡と出羽の雄勝郡の境界線上には安倍頼良の息のかかつた者たちがすでに多

数入り込んでいるという噂も耳にする。深い山間なので国府側は見えぬふりをしているのだろうか。どうせ開墾などできる土地ではない。

〈それでも……柵なれば造れる〉

まさかとは思うが、経清は警戒していた。今度の婚礼とて勘繰るつもりになれば……安倍頼良の息子貞任が嫁を迎える相手は氣仙郡の名族金為行の娘なのである。氣仙郡は磐井郡を海側から取り囲むように腕を伸ばし、桃生の城近くまで達している。もちろん現在は国府多賀城の支配下にあるが、もし安倍頼良と連動すれば危ない。常駐の兵の少ない桃生の城などたちまち撃ち破られてしまうだろう。そこから多賀城は目と鼻の先だ。自分が陸奥守の立場にあれば、とても祝福など言える状況ではないはずである。

経清は溜め息を押し殺して登任を眺めた。登任は酒で体が温まりはじめたのか陽気になっていた。居並ぶ郎党たちにも不安は微塵も見られない。下らぬ冗談に笑い合っている。

〈阿呆か、こやつら〉

経清は苦々しく土盃を口に運んだ。

「貞任という男、体は大きいがうつけじゃそうだな」

知っているか、という目で登任が笑った。

「錢で買われた嫁じゃと金為行が嘆いておるそうな。うつけゆえに頼良も派手な婚礼を挙げさせてやりたいのであらう」

「金為行は名だたる智者にござります。錢で娘を売る男とも思えませぬが」

「辺境の智者などその程度のもので。氣仙は同族の金為時こんのためときが握っておる。恐らくは為時の風上に立たんとして頼良に取り入ったに違いない。うつけが娘婿なら扱いやすかろう。いくらでも頼良の錢を引き出せる」

「貞任とお会いなされたことは？」

「ない。頼良も案じていたのじゃ。儂が前で失態をいたせば取り返しがつかぬでな」

「みどもはそれと異なる噂を耳にしております。刀にかけては奥六郡一とか」

「うつけには怖れというものがない。それに、頼良の倅せがれに傷をつけるような間抜けはおらぬ。とてもそなたの腕にはかなうまい」

登任の言葉に皆が領いた。経清は剛の者として国府にまで名が広まっていた。

「婚礼の座興にそなたと試合わせるのも面白いの。帝おのみの力を示すことにもなろう」

「加減できぬ性質たちゆえ」

経清は即座に断わった。どちらに転んでもいい結果にはならない。

「よい機会じゃ。そなたに見てもらいたい刀がある。陸奥守に赴任して間もなく安倍頼良が届けでよこした。俘囚こしうが拵しらえた刀だ」

登任が命ずると郎党が引き下がった。やがて一振りの太刀を掲げてきた。幅と反りの深さまで蝦夷刀えみしとうと一目で分かる。受け取った経清は刀身を抜いて灯にかざした。何十振りとなく見ている

が、これほどのものはじめてだった。刃紋がきらめいている。この厚みと重さなら都の刀などひとたまりもない。刀が道具であることを経清はひさしぶりに感じた。道具は目的のために存在する。刀の場合、その目的とは敵を寸断することではない。

「気に入ったか？」

満足そうに登任が質した。

「明日の婚礼の席で帯びねばならぬ。それで持参した。用が済めばそなたに遺わそう」

「この刀をみどもに？」

「儂には重すぎて扱えぬよ。それに無粋じゃ。儂は武者と違う。都では無用」

「ありがたきしあわせ」

「なに、俘囚の拵えた刀などだれも喜ばぬ。そなたのような者こそ珍しい」

「登任が言う」と笑いが広がった。

「風流を解さぬゆえ、刀まで無骨じゃな」

「お恥ずかしき次第にござります」

「あ、いや、そなたのことではない。俘囚どものことよ。勘違いいたすな」

笑いがますます膨らんだ。

経清は複雑な思いで笑いに加わった。刀をも風流と見做す公卿にとつて、刀を抛り所とする武者も俘囚と同一なのである。経清は武者であつた。意味のない位階などつくに忘れてゐる。